

藤村「処女地」に執筆した女性作家達(一)

—— 生田花世、池田小菊、川島つゆ、澤ゆき ——

永 淵 朋 枝

序

島崎藤村が「婦人の眼ざめを期待し」て創刊した婦人雑誌「処女地」(一九二二(大11)・四―二三(大12)・一)に執筆した四名の女性達のうち、文学事典等に記載のない三三名については「藤村『処女地』に執筆した無名の女性達・目録」(「神女大國文」二〇〇七・三)において、執筆目録を作成した。その過程で、鷹野つぎ以外ほぼ無名と論じられてきた「処女地」の執筆者達が、当時の新聞雑誌にかなり登場していることがわかり、その足がかりをつくったという「処女地」の意義が明らかになった。

本稿では、文学事典等に項目のある一一名以下、「女性作家達」と記す)中、生田花世、池田小菊、川島つゆ、澤ゆきの四名について考察する。女性作家達一一名は、無名の執筆者達と較べて格段に多い量の執筆をしているので、個々の執筆目録については別稿を用意したい。本稿では、(一)女性作家達の略歴、主な著書、

項目のある事典⁽¹⁾(二)評伝、年譜の有無や研究状況(三)同時代批評(四)女性作家達が「処女地」に発表した作品、「処女地」や藤村についての女性作家達の言及を調査し、女性作家達の主に著書から彼女達にとつての「処女地」の意味を明らかにしたい。氏名は、一般の事典に掲載されている表記を用い、「処女地」終刊号「附録 本誌執筆者別総目録」に掲載された氏名の表記が異なる場合は、それを「」内に記す。

一、生田花世

(一) 一八八八・一〇・一五―一九七〇・一二・八。徳島県板野郡松島村(現上板町)泉谷生まれ。本名西崎花世。和三盆糖業の衰退によって家計の苦しくなってきた中、血書を書いて県立徳島高女入学を許可された。卒業後、小学校教員をしつつ、「才媛文集」や「河井醉茗編集『女子文壇』」に投稿。「産土神^{うぶすまがみ}」等を詩の選者横瀬夜雨に認められ、長曽我部菊子のペンネームで三〇数

編の詩、散文を発表。父病死後、一九一〇年上京。小学校教員、「女子文壇」記者（一三年廃刊）、出版社の事務員、寄席の女中等、職を転々とし、生活難に苦しむ中、セクシアルハラスメントにあつ。「青鞥」に参加。「恋愛及び生活難に対して」（「青鞥」一四・一）に感動した詩人生田春月に求婚され、結婚（同年三月。入籍せず）。春月を通して外国文学に親しみ、文士と交流。「反響」に発表した「食べることと貞操と」（一四・九）が発端となつて、「青鞥」等で貞操論争が起ころ。「青鞥」廃刊後、山田たづ等と「ピアトリス」（一六・七・一七・四）を創刊し、毎号短編等を執筆した。「処女地」に寄稿、三毛やす子の「ウーマンカレント」や奥むめおの「婦人運動」、春月主宰の「詩と人生」にも、詩、短編、隨筆を発表。「文章俱樂部」や「時事新報」、「読売新聞」、「文芸春秋」、新婦人協会の「女性同盟」、婦選獲得同盟の「婦選」等にも執筆。「女人芸術」創刊（二八・七）にあたつて、長谷川時雨に協力。三〇年五月春月自殺後、『生田春月全集』（三〇・一二・三一・一）全一〇巻（新潮社）編集にあたり、春月主宰の「詩と人生」を再刊（三一・一）、編集。戦時体制下、皇軍慰問視察等に参加、体制に協力的な著作を発表。罹災。五三年頃から始まつた主婦の讀書グループでの『源氏物語』の講義が、三〇〇余りの会員を擁する「生田源氏の会」に発展し、会によつて八王子市光照寺に建立された歌碑除幕式の二ヶ月後、八二歳で死去。

主な著書に、上京前後のことを中心に描いた小品集『情熱の女』（長曽我部菊子著 岡村盛花堂 一三・一）、貞操論争にかかわ

る文章等を収めた感想集『恋愛巡礼』（紫鳳閣 一五・六）、高女の頃から上京後の生活、春月との結婚生活、三角関係の苦悩等を描いた小説集『燃ゆる頭』（春月の装幀、神近市子・長谷川時雨・山田邦子序文、中西書房 二九・四、不二出版、叢書「青鞥」の女たち 第5巻、八六・二に復刻版あり）、『女流文芸史のはしり』²⁾、大正、昭和の女性作家のほゞ全貌³⁾を書いたといわれる『近代日本婦人文芸女流作家群像』（行人社 二九・一一。大空社、叢書女性論25、九六・五に復刻版あり）、詩集『春の土』（詩と人生社 三三・三）、戦時下のものに、『銃後純情』（道文書院 四〇・一〇）、『海国女性史』（立誠社 四三・七。『銃後純情 海国女性史（抄）』として、ゆまに書房『女性のみた近代』⁴⁾ 007 女と戦争 二〇〇四・六に復刻版あり）、『一葉と時雨』（潮文閣 一九四三・一〇。大空社、伝記叢書91、九二・七に復刻版あり）、戦後、執筆依頼を受けて自身の経験と見聞をもとに書いた『未亡人』（三元社、女性の書 第14巻、四九・一〇）等がある。生田源氏の会の幹事矢野克子、和田艶子らが中心となり、「女性教養」（大日本女子社会教育会）に連載された源氏物語の解説をまとめた『源氏物語——原文入解説』（生田源氏の会 六七・一〇）の「まえがき」には、「源氏物語」の「目に見えぬ超自然力、人間以上のつよい力に対する信頼と畏怖」を味わいたい、とある。没後に編集された『生田花世詩歌全集』（木犀社 七一・一〇）は、詩、短歌、隨筆の章、及び年譜等、片岡球子の表紙絵から成る。

『明治大正文学美術人名辞書』『日本近代文学大事典』『現代女

性文学辞典』『日本女性人名辞典』『青鞨 人物事典—110人の群像』『詩歌人名事典』『日本女性文学大事典』等に項目が立てられている。

(二) 評伝に、和田艶子『鎮魂 生田花世の生涯』(七一・一〇) 出版社記載なし。大空社、伝記叢書200、九五・一二に復刻版あり。著作年表あり、児島光一『阿波女流文学界の異彩 生田花世とその文学』(教育出版センター 八六・一〇)、評伝的小説に戸田房子『詩人の妻 生田花世』(新潮社 八六・一一)等があり、復刻版所収の花世の著書には解説が付されている。さらに、花世の小説、感想、評論、随筆、詩・短歌の章と、略伝・解説、年譜から成る『生田花世読本』(第一出版 九六・一二)が生田花世の会編著で出されている。生田花世の会は、九四年、花世の郷里板野郡の板野町にて設立された。

(三) 「貞操論争」に関しては、飢渴の脅威のみならず自身の性的欲求までを書いた花世の主張に批判的な論が目立つ。一方、『真をしたひて』(『青鞨』)は、「私は私の美しくないのが苦しい。然し此の苦しみは耻ではない」という「功実な叫びの中に何とも云へぬ力強さが籠つてゐて」「慥かに何人も剥奪しがたい」力がある(赤木桁平「三月の評論」、『ホトトギス』一四・四)と評され、「ほそのを」(『文章世界』)は「いかにも女性の作品らしいデリカシーを持つてゐると同時に、人間生活の縦の関係を可なり深刻に見透して」前景と背景の書き方が「巧み」(中村星湖「特別募集小説選評」、『文章世界』一八・二)等と評された。『明治

大正文学美術人名辞書』(二六・四 前出)には、「情熱の女』『恋愛巡礼』等は可なり歓迎されたものだが、尚『処女地』に発表した『抒情詩』、『ある主婦の詩』婦人公論に出した『情熱地獄について』の外『婦人と貧富の問題』『新婦人協会と私』等の詩、感想、論文等によつて各種の方面に活動してゐる女性の一闘士たることがわかる」とある。『処女地』掲載論文への言及が目目される。『女流作家十四人集』(現代作品選集 第六編) (高陽社編輯部編 高陽社 二四・九)に「継児」、『日本現代詩大系 第七巻』(河出書房新社 七五・三)に「春の土」から「早春」「春の土」「桜は咲けど」が収録された。

(四) 処女地 3号 一九三二(大11)・六「抒情詩十章」
——2号「牛込より」(「おとづれ」欄)に「家事のいとまぐに残した抒情詩を寄稿いたします」とある。

処女地 6号 一九三二(大11)・九「ある主婦の詩」
——「処女地」に執筆した女性作家、若杉鳥子との交遊の日々を感謝した詩。

処女地 9号 一九三二(大11)・一一「或る時の心の動き」(創作) —— 上京して小学校の女教師をつとめる主人公の困難と生徒との交流を描いたもの。燃ゆる頭「所収の『北風』は、この作品の結末部等かなり手を加えたものである。

花世には膨大な数の作品があり、「処女地」掲載作品は、そのごく一部であるが、花世の中では「処女地」は確固たる位置を占めていたことが、以下の文章等からわかる。

甚だ貧弱なあしあとではあるが『女子文壇』『青鞥』『ピートル』『処女地』『ウーマンカレント』『女人芸術』と、かういふ風に明治大正昭和の女流文芸雑誌の主流にとにかくにも始終して来たといふ事に、私の無限の喜びと満足はつきない（『自序 私の執筆履歴』「燃ゆる頭」）

「処女地」は「女性にとつて、発表機関のない」時代の「女流文芸雑誌の主流」のひとつに位置づけられている。

「処女地」について花世は、筆を持つ女の悩み——『処女地』終刊号を読む（『東京朝日新聞』二二・一二・三〇）を書いている。「この雑誌にはいっつとりとした柔和な慎ましい女性の良い感情がどこを開いても匂つてゐる。『手紙』がこゝでは何よりも多く見られる」と書いた上で、横瀬多喜子、田尻稲子、大井さち子、鷹野つぎ子、伊東英子、辻村乙未を評し、「私は『処女地』によつてゐたこれらの女流作家の未来に楽い期待をもたずにはいられない」、「処女時代の自由な芸術愛は、結婚生活の相手次第で、圧迫され粉碎されてしまふ。また、子育てをすると頭脳は散漫になり、時間がないので筆持つことが遂には出来ないやうになつてしまふ。幸ひにこの二つとも切り抜ける事が出来てもブルジョア階級の婦人か、有力な背景のある婦人かでなければ文壇には入れない」然し、いふまでもなく、女もまた強く生きよである。強い歩み、辛抱づよい努力の外には自分をよりよくする方法はないのだ「文芸に盲目的熱愛を持ちつゞけてゐる私は、過去十数年間に、『女子文壇』『青鞥』『サフラン』『ピートル』『赤光』これらの

婦人文芸誌を送迎して、今や、『処女地』をあのやうにも愛してゐたのに、これからはもう『処女地』もない。寂しい、実に寂しい（『近代日本婦人文芸女流作家群像』所収『処女地』について）は少し異同あり」と書いている。「十二月二十七日記」のこの文章に終刊号が送られてきたとあるので、『処女地』新年号が、前年末に発送されたこともわかる。

花世は、『女子文壇』によつて横瀬夜雨に詩を、河井醉茗に文を学び、父の友によつてすすめられた「ホトトギス」の写生文「真を書け」という行きかたがわかりやすかった、と書いている（『燃ゆる頭』、『未亡人』等）。藤村から大きな文学的影響を受けたとは言いがたい。けれども、『島崎藤村氏の親切なお心から発行された『処女地』（『明治大正年代の女流作家』『近代日本婦人文芸女流作家群像』所収）という書き方や、『ユーモアの無い一日はさびしい一日である』と云ふ言葉、此は人も知るとほり、島崎藤村氏の言葉であるが、これをまことに心深い意味に解した私はいつのころからかユーモアといふことを日常生活に愛好する気持となつたのである（『同書所収「女性のユーモア作品」等には、藤村への尊敬の念が読み取れる。

二、池田小菊（池田こぎく）

（一） 一八九二・三・一五—一九六七・三・九。和歌山県有田郡箕島町（現有田市湊町）生まれ。一九二二年和歌山女子師範学校を卒業後、県下の小学校教師を経て、二二年招かれて奈良女高

師附属小学校訓導（正規の教員）に就任。絶対服従、無批判の「教授法」ではなく生徒の主体的興味に基づく「学習法」を構想する木下竹次主事のもとで、「自由」と「協同」を重んじるダルトン・プラン、合科学習を、日本で初めて実施。次第に方法論より子どもの側からの表現である綴り方指導に傾き、『私の教育記録』（東洋図書 二五・七。大空社、叢書女性論 22 九六・一に復刻版あり）をはじめ、三二年頃まで、多数の教育関係の著書を刊行した。その一方で、和歌山での教師時代に小説「僕には娶る妻がない」（池田こぎく著。弘道館 二〇・五）を刊行。奈良に赴任後、東京大阪両「朝日新聞」に恋愛小説「帰る日」を連載（二五（大）・五・一～七・二九。九〇回）し、同年八月に『帰る日』（表紙は池田小菊、奥付は池田こぎく。朝日新聞社）刊行。二六年、女高師での講演依頼のために奈良在住の志賀直哉を訪問、次女留女子の家庭教師をとめる。二八年、神経衰弱が昂じて訓導を退職。志賀直哉に師事し、短編を発表。三三年、共産党資金網摘発の際、シンパの嫌疑で検挙される。『鳩』（小林秀雄推薦『文学界』三六・八）、「札入」（「改造」三七・九）を発表し、奈良における志賀直哉との交流を軸とした「奈良」（『文学界』三八・一一）は芥川賞候補になる。『甥の帰還』（『文芸』四〇・四のち「鹿造夫婦」）等を発表。戦後は、奈良県民主婦人団体初代会長に推され、婦人会館や機関紙「婦人奈良」の発行に尽力。五一年婦人会館は落成したが、後日新知事との対立、会の分裂を招き、引退。争いの間に健康状態を悪くした。戦後はほとんど小説の筆を執れないまま、

六七年、七四歳で病没。奈良県婦人の指導者として小菊を慕った小菊会によって、奈良正暦寺に文学碑が建立され、『関西文学』（七二・五）の「池田小菊特集」に遺稿「小説の神様」が掲載された。

主な著書としては、教育関係の書として、『私の教育記録』（前出）、『文の指導と其の教室経営』（明治図書 二七・四）、『子供と綴方教育』（明治図書 一九・二）、教員が家庭の親のような態度をとって団体生活を営むことを主張した『父母としての教室生活』（厚生閣 二九・一〇）等がある。文学関係の書に、二人の男性が恋、教育、女権問題等を論じて理想の妻となる女性がいないと嘆息する『僕には娶る妻がない』（前出）、『帰る日』（前出）、『来年の春』（全国書房、女流作家叢書、四一・一二）、『かがみ』（全国書房 四二・八）、『奈良』（全国書房 四三・九）、源平争乱時代の奈良を舞台とした恋愛小説『東大寺物語愛と死』（全国書房 四七・九）等がある。

『日本近代文学大事典』『図説教育人物事典』『奈良近代文学事典』『現代女性文学辞典』『日本女性人名辞典』『日本女性文学大事典』等に項目が立てられている。

（二） 評伝に、生田幸平『評伝 池田小菊』（私家版 八三・三）があり、前出の『関西文学』に小菊の特集がある（共に、年譜あり）。小菊は文学よりも教育の分野で注目され、『学習研究』『教育文芸』といった教育関係雑誌掲載の小菊の文章も含めて、その授業論、教室の「家庭化」、合科学習⁽⁴⁾等が研究され、評価されている。文学研究としては、『帰る日』等の論が僅かにあるほか、

奈良女子大学に寄託された、志賀直哉や網野菊の書簡等小菊資料の研究がすすめられている。⁽³⁾ 評伝や文学関係の事典、研究は、『帰る日』以前の文章に着目していない。しかし、小菊は『帰る日』以前に、『僕には娶る妻がない』を刊行し、『師範の或る乙女へ』を讀みて、『女学世界』二〇・一一や、奥むめおの『職業婦人』に『職業婦人といふ女』(二三・六)を発表し、後続誌の『婦人と労働』『婦人運動』等にも健筆を揮っている。『処女地』掲載論文もこの時期である。

小菊の初期の著書には、教育と文学とが一体化している。たとえば、単行本『帰る日』の序には、「子等よ。／おゝ子等よ」遠慮してはなりません。／ゆき倒れてはなりません。／あなたが、／あなただけにしかない、／その純真と、／正直を、／失ひさへしないなら、／人の世のもつれは、／きつと、きれいに、／裁けるに違ひないのですから」という教え子への詩のあとに、「さうした私の心持ちを、紀伊子といふ黎明期前のヒステリー女に盛つて見様と思つて、描いたのがこの作品です」とある。紀伊子が、恋人と叔母との仲を疑つて煩悶し、東京に家出をし、恋人の迎えで奈良に帰るといふ、この恋愛小説には小学校教師も子どもも出てこない。序と本文を結ぶのは、小菊の「心持ち」である。また、『私の教育記録』には、教育論「教師篇」に小説「創作遊ぶ男」がついている。「教師篇」には、『帰る日』が恋愛小説であつたことから「恋愛の経験のない」「一人の教育家の書いたものとしては」不適切、といった周囲の批判があつたことが書か

れ、「教育といふ職業が、自然に私に小説をかかせたのです」とある。このほか、子ども向け学習の仕方の手引き『私の家』(南光社 二四・六)や、『合科学習の仕方による算術問題の作り方と解き方』(文明社出版部 二四・一二)といった著書にも、巻末には「童話」が掲載されている。小菊は、志賀直哉の直弟子として知られているが、小菊の小説は、子どもたちと向き合い、本当の教育とは何かを追求した、教育と渾然一体となつた「心持ち」から書かれ始めたことを見落としてはならないだろ⁽⁴⁾。

(三) 小説『僕には娶る妻がない』(前出)は、『時事新報』(同・六・二一)「批評と紹介」欄に、「一種の女性觀を説話的にものせり」と紹介されている。

「帰る日」の連載については、『評伝 池田小菊』(前出)に、連載予定の菊池寛の都合が急に悪くなり、「大正十一年の朝日新聞社の長編小説懸賞募集で、佳作となつた小菊に白羽の矢が立つた」とある。これ以外のこととはわかつていなかったが、小菊は近親に死別した人間の悩みから生まれたものが「四年前に『大阪朝日新聞』の懸賞小説募集へ出して佳作に入選した『女』でした。それに力を得て昨年『帰る日』を書いたのです」と書いている(「初めて小説を書いた動機」、『主婦之友』二六・三)。「大阪朝日新聞」に「大正十一年九月十五日迄に集つた」懸賞長編小説の「佳作と数へてよいもの」一六篇の名の中には確かに「女」がある(「大阪朝日新聞」二三・九・二)。「帰る日」の予告には、「作者は、此一篇を以て文壇に晴れやかなデビューを為すべき隠れた一女性

で、現に奈良女子高等師範附属小学校に訓導として特別級を担当しつつある人、いはゆる『私小説』の形式による可憐な恋物語」とある（東京大阪「朝日新聞」二五・四・三〇）。「帰る日」連載前の東京大阪「朝日新聞」には、大阪朝日新聞一万五千号記念「懸賞当選映画劇 大地は微笑む」（吉田百助 二五・一・一〜四・三〇）が連載され、「帰る日」連載終了後は菊池寛「第二の接吻」が続いた。

なお『帰る日』出版記念会が「かねて小菊さんと相識する奥むめを、宇野千代、鷹野つぎ、伊福部けい子、河崎夏子さん等が發起人」となつて計画され（「読売新聞」二五・八・七「最近の池田小菊さん」の写真入）、九月一二日に開かれた。菊池寛、新居格、宇野千代、吉屋信子らが挨拶し、小菊は「私も今までに女らしい恋を二度三度おぼえたのでありますが、いつも教育者と云ふ觀念のために、この心の叫びも押さへねばなりませんでした。そして三十三になる今日まで人の心の温かさに接することが出来なかつた。私はこの意味で教育界をうらんでゐる。私が教育者でありながら恋愛小説を書いたと云ふのは、日本の教員達が之によつて人間としてめざめてもらひたい為」、「私は芸術と教育を一致させる為に今後も尚ほ奈良師範にあて創作の方面に歩みを続けて行きます」と語つた（二五・九・一五。会の写真入）。

『帰る日』は、「新時代のデリケートな神経や心情の女性独性の純粹な詩が氣持よく表現されてゐる。わたしはその意味でこの作品を高く評価したいと思ふ」（木蘇穀「最近の長編小説を読む」

『新潮』二六・一二）、「どこまでも老熟した上手さがあつたと思ふ」（生田花世「この頃の女流作家」『近代日本婦人文芸女流作家群像』所収）等と評された。

広津和郎編『現代文学代表作全集 第5巻（万里閣 四八・七）に小菊の「鹿造夫婦」が収録されている。

（四） 処女地 1号 一九三二（大11）・四 池田こぎく「時代の要求する『新しい女』（一）」

処女地 2号 一九三二（大11）・五 池田小菊「時代の要求する新しい女（続）」——（一）は「新しい女」の問題を、「結婚問題」「教育問題」「職業問題」「権利問題」に分けて論じ、婦人自身の目覚めを喚起する。（続）は、女性が「益々女性的に伸び」ることに理想を見、「狂ひ廻る者をグツト抱ましめて、ねん／＼歌を歌つて、たたきつけて寝かせる、母性の強さ」のある「新しい女」を要求している（『私の教育記録』の「婦人問題の問題」に、男に対する女の力が同様の表現で表されている）。

「処女地」の頃は、小菊の生涯の中で、前年四月に兄が急死、同年七月に父が、翌年十一月に母が共に風邪から没した、近親者の死が相次ぎはじめた時期にあたる。父の死のためか、「処女地」掲載論文は四、五月のみである。しかしながら、男性とは異質の女性としての「新しい女」を要求する掲載論文の主張は、小菊の他の著書の主張と重なり、小菊が戦後、婦人運動に進むことを予測させる。

「処女地」の数年後に小菊は、藤村の行きかたへの違和感を書

いている。「藤村氏は私の好きな作家の一人」だが、「今度の藤村集」(新潮社『現代小説全集 第九巻』二五・五)に限って読む気がしない、冒頭の「障子といふものは面白味の多い。好ましいものだ」という一節(『後の新片町より』新潮社 一三・四所収「障子」の口絵自筆原稿)、「障子を眺めてうれしがつてゐる、静かなその言葉が、私の要求にびつたりこなかつた」、「あらゆる醜いものの争鬭の渦中へ、私といふこの人間をなげつけて、血みどろになつて狂つてゐる、その私の相を、じつと見つめて、人よりは一日でも余計長生きの出来るやう、人よりは一つでもよけいに幸福を拾へる様にと、そのいきさつを、裁いて行くのが、今の人間の相」であり、「一枚の障子に、この大切な私といふ人間をなげつけてしめじみした気持ちで見つめていられたのは「世界が斯うまで狭くなかつた時代の人間の楽しみだつた」、「世に逆つてくれる」創造人に教え子を育てたいと書くのである(『私の教育記録』所収。一部「婦人と労働」二五・八掲載の「時代に逆ふもの」)。

三、川島つゆ(川島つゆ子)

(一) 一八九二・一・一〇—一九七二・七・二四。埼玉県忍町行田(現熊谷市)生まれ。浅草に育つ。本名、沼田以志。旧姓川島。東京三輪田高女卒業後、「ホトトギス」「俳味」等に短編、短歌、俳句を発表。沼波瓊音・勝峰晋風などに就いて俳諧を研究。一茶の注釈研究が現れ始めた大正末に『一茶俳句新釈』(川島露石著 紅玉堂書店 二六・一)を著し、同年七月「早稲田文学」

の一茶百年記念号に「江戸時代の一茶」を書いて、女流俳人として知られた。一九二八年創刊、松原地蔵尊主宰の「境地」同人。武蔵野の自然・人文研究をする武蔵野会に紅一点で参加して、山中共古(山中笑)らの話を聞き、「武蔵野」等に寄稿。三一年創刊の「句と評論」にも関係し、藤田初巳とも親交があった。三三年紋章学者の沼田頼輔と結婚するが、翌年死別。社会主義者の石川三四郎や新内節の岡本文弥とも親交があった。在野の研究者であつたが、五一年別府女子大学教授となり、その後六六年まで別府大学(改称)教授をつとめた後、梅光女学院大学教授。八〇歳で縊死。女性俳文学研究者の草分け的存在。

主な研究書に、藤村と勝峰晋風とが序文を書いた『一茶俳句新釈』(前出)、『一茶の種々相』(相馬御風序文 春秋社 二八・七)、上梓に六年を費やした『芭蕉七部集俳句鑑賞』(春秋社 四〇・一一)、『加賀の千代女』(小学館 四二・一〇)、『一茶』(春秋社 四六・九)、『新註おらが春』(明治書院 五四・五)、『おらが春新解』(明治書院 五五・五)、『女流俳人』(明治書院 五七・一一)、『日本古典文学大系 第58 蕪村集一茶集』(岩波書店 五九・四)の一茶集の校注等があるほか、『良寛』(小学館 ジュニア版伝記全集11 六四・六)や一茶、千代女、芭蕉についての少女向け読み物等がある。また創作集として、詩歌句集『玫瑰』(境地発行所 二七・九)、歌集『銀の壺』(金子元臣序文。交蘭社 三五・七)、随筆集『カンナの頬かぶり』(別府大学文学部国文学研究室 六〇・二)等がある。さらに、つゆの教え子で共同

生活者であった女性史研究者の古庄ゆき子編による『紫匂う 川島つゆ遺稿集』（七三・七）、『大震災直面記 川島つゆ遺稿 第2集』（七四・七）、『春の草 川島つゆ遺稿 第3集』（七五・七）がある。

『日本近代文学大事典』『現代俳句大辞典』『島崎藤村事典』『日本女性人名辞典』『詩歌人名事典』等に項目が立てられている。

(二) 古庄ゆき子氏がエッセイスト・クラブ賞を取った時に書いた『断想 川島つゆ先生』（日本エッセイスト・クラブ編）『こころを言葉に』エッセイのたしなみ 集英社（二〇〇七・七）に、つゆの生涯が簡潔に紹介され、「教師になる気は全くなかったといわれる先生の講義は教科書風でなく、鮮度の高い内容で人氣が高かった」とある。古庄氏は、つゆの遺稿集、「故 川島つゆ著作目録」（大正七年～昭和四五年。別府大学所蔵）、「川島つゆ著作目録」（大正七年～昭和二十年）（梅光女学院短期大学国語国文学会「国文学研究」一九七三・一一）も編んでいる。

(三) つゆは、花世の「女流戯曲家と女流俳人（昭和四年記）」（『近代日本婦人文芸女流作家群像』所収）に名をあげられた五名の「現在の女俳人」のうちの一人である。また当時から、連句注釈の盛行に対して俳句（発句）の注釈はほとんどなかった、つゆの『芭蕉七部集俳句鑑賞』によつて「芭蕉俳諧の面目はほとんどのことなく窺はれると言つてよからう。著者が女性の身で長い学究的努力に耐へ、しかも七部集の研究中最も不備な部分に見事な新開拓を試みたことを、こゝに深く喜ばずに居られない」（頼原退蔵

「『芭蕉七部集俳句鑑賞』」朝日新聞「四一・一・一七」等と評された。現在でも『おらが春新解』は、「連句の評釈を試み」た「今日なお活用される名著」（矢羽勝幸）『一茶大事典』大修館書店九三・七）等と、高く評価されている。

つゆは、「命をすりへらさない仕事が、この世にあるとは思われない」（『カンナの頬かぶり』前出）と書く研究者である。女性研究者の不遇時代を、『一茶俳句新釈』の「自著を手にした瞬間、処女出版のよるこびもなかばふつ飛んでしまった。背文字もトビラも川島露石著となっている。露石とは連句のけいこのときに用いた名ではある」「女性の著書は売れなかつたという思惑からであつた。私、というよりも一世代前の女は、このような道を歩まされてきたのである」と書いている（『紫匂う』前出）。逆に「読売新聞」婦人欄では、「雑草愛から優しい労働者の友 一茶研究の著書さへある 独身の婦人俳人 川島つゆ子さん」（『雑草の中で句作にふける川島つゆ子さん』の写真入。二六・九・一六）、「猫みたいな私 妻ある人に恋され 生涯を句作に 女流俳人 川島つゆ女史」（『机にもたれた女流俳人』の写真入。二七・一一・七）と、著書刊行の際等に大きく取り上げられ、「批評と紹介 銀の壺」（写真入。三五・八・二八）には「故沼田頼輔博士の夫人」とある。婦人欄の関心は、女流の名士というところにあつたことが窺える。

(四) 処女地 8号 一九三二（大正）・一一『貧しい支那皿』（短編）——「A氏」の見送りにほじまる、いくつかの別れを

描く。前半部分は『安孫子理兵衛思い出』（安孫子理兵衛思い出刊行会 不二印刷 七一・九）に収録されている。二一年に安孫子理兵衛氏が日本読書協会の特派員としてドイツに出発する時のことを踏まえているらしい。

処女地 9号 一九二二（大11）・六・二二 「目標のない生活」——「筆に対する妄執さへなかつたら」「妻とも呼ばれず母とも呼ばれず、何の纏つた智識を得ることもせず、身を過すだけの職業を持たないやうな十年に近い日を送り得たらうか、

「この頃私はしみぐ」と芭蕉の境地が考へたくなる。芭蕉は一味の俳諧に流れるあの堪らない面白さのために「生涯を擲つて了つた」、「終に無能無才にしてこの一筋につながら」と、あの詠歎な歌は私を悲しませる、「私は如何して生きて行つたらよいのだらう。何処に私の生の意義があるのだらう」という文章は、俳文学研究者になるつゆを予測させる。

処女地 10号 一九二三（大12）・一 「瓜の花」（短編）

処女地 10号 一九二三（大12）・一 「おばさん」（詩）

——『玫瑰』に収録された。

つゆが俳諧注釈の仕事を開始したのは、「処女地」終刊年九月におきた関東大震災後のことである。住居の本所横網町は震災被害の甚大だったところで、つゆはブラック住まいの六年間に、勝峰晋風のすすめで『一茶俳句新釈』、『玫瑰』、相馬御風のすすめで『一茶種々相』を世に出した。『一茶俳句新釈』には、「震災後特に暗い日が続いた」、「私は既に小さな自分自身を書き現すといふだけ

の仕事に興味を失ひかけて居た。然も、私は何かしなければ居られなかつた。何等かの方法の下に仕事を持たずには居られない境遇でもあつた、「仄な光を見る心地で、この不馴な仕事に向」かつた、とある（「自序」及び「一茶の郷里へ」）。「処女地」掲載作品は、「小さな自分自身を書き現す」ものであつたかもしれないが、それを書くことが、当時のつゆにとっては必要なことであつたのだらう。つゆは俳諧研究の傍ら、短編も書き続けた。ことに「鼠色の外套」（「女人芸術」二九・九）は「貧しい支那皿」（「処女地」後半と同場面を描いている。

藤村とつゆの交流については、「二箱の苺——藤村と私——」

（「藤村研究 風雪」5）七三・九に詳しい。藤村は、快く引き受けた『一茶俳句新釈 序文』（市井にありて『岩波書店 三〇・一〇所収）において「新釈が世に公にされるまでの著者の苦心と準備」を汲み取り、「慰問袋」（「改造」三一・四、『藤村全集 第十三巻 筑摩書房 六七・九所収）で『芭蕉七部集俳句鑑賞』を丁寧（に）評し、作者の「精進」を評価した。紙の配給事情が混沌としていた戦時下に春秋社の前社長神田豊穂氏が『芭蕉七部集俳句鑑賞』の出版を引き受けてくれたこと、仕事そのものの価値を問うに値する（という）編集担当者の言葉によって、藤村が序文を承諾していたにもかかわらず、つゆが序文辞退を申し出たことも書かれている。つゆは「我々の思ふほど芭蕉が枯れ切つた人でなく、まだ十分の野心もあり、衡学的な域を全く出ぬけ切つていなかった」と、『奥の細道』のあくを論じた。その論文末尾には、次の

ようにある（『芭蕉のあぐ』、『書物展望』四三・一〇。『カンナの頬かぶり』所収文には異同あり）。

この稿を継ぎながら切に思起されるのは、昨年の春満開の桜に風の強く当る日、大磯に藤村先生をおたづねしたことであった。先生は私の顔を御らんになると、直ぐ俳諧に関するお話をなさるのであったが奥の細道のあぐに及ぶと、老文豪の前にありながらも、私は自然に言葉の激して来るのを如何しようにもなかつた。（中略）特色のある静かな微笑をもらされた。

「奥の細道の書かれた当時の芭蕉の年令を考へて御らん下さい。あぐがあつても無理はない。私なぞ七十になつても未だあぐが抜け切らない。」

私は何も言へなくなつてしまつた。そして、私の筆も最早動かなくなつた。

手あぶりを隔てゝお話したその同じ書齋に安置された先生の御遺骸にお別れを告げたのは、つい半月前のことである。何時も何処かしら、あの澄んだ深い目で蟻のやうな私の歩みをじつと見つめていて下さるような先生でもあつた。現代において芭蕉を彷彿させるたつたひとりの人でもあつた。専門家以外の、否、専門家でないだけに、一層深く芭蕉の心に歩み入つてゐられる先生でもあつた。芭蕉について語り、芭蕉について聞いて頂きたいたつたひとりの人を喪つたのである。思出の中に先生をしのぶには、私の悲しみは未だあまり

に生々しい。

四、澤ゆき（澤ゆき子）

（一）一八九四・二・一五（実際には九三年）――一九七二・一・二九。茨城県稲敷郡茎崎村小茎（現、茎崎町小茎）生まれ。本名、飯野ゆき。旧姓相澤。牛久沼畔にある酒造家に生まれ、沼に親しんで育つ。一九〇五年、単身上京して親戚に寄寓。〇八年、技芸学校（現共立女子大学）に入學し、一年卒業後、帰郷。一月森鷗外を訪ねる。鷗外との書簡のやりとりからは、ゆきがドイツ語を学び、詩人としての修業をつみたかつたことがわかる。一四年、親の決めた電ヶ崎町（市）の飯野保平と婚姻届出。保平は九人兄弟の長男で、飯野家は使用人の多い酒造家。「処女」に投稿した詩を選者の川路柳虹に認められ、川路柳虹に師事し、詩集『孤独の愛』（川路柳虹序文。曙光詩社 二一・四）を出版して女流詩人として認められた。川路柳虹主宰「現代詩歌」、「炬火」同人、詩話会「日本詩集」同人となり、「詩聖」、「日本詩人」等で活躍。佐藤惣之助主宰「詩の家」、「嵐」、佐藤清「詩声」同人。服部嘉香主宰「現代詩文」、「詩神」、「地上楽園」、「日本詩壇」等にも積極的に詩を発表した。七九歳で死去。

詩集に『孤独の愛』（前出）、『沼』（一）（黎明社 六一・六）、増補版『孤独の愛』（竹頭社 六六・五）、『沼』（二）（ポエム社 六七・一）、『浮草』（光風社 七一・四）がある。吉田登美穂編『澤ゆき全詩集 沼の詩人』（竜文ブックス 九二・八）は、これら

の詩集を一冊に集め、小伝、澤ゆき詩碑建立関係記事を付したものである。

『明治大正文学美術人名辞書』『日本近代文学大事典』『島崎藤村事典』『日本女性人名辞典』『詩歌人名事典』等に項目が立てられている。

(二) 評伝に、吉田登美穂編『沼の詩人 沢ゆき』(筑波書林 ふるさと文庫 八四・一)、小野孝尚『詩人 澤ゆきの世界』(筑波書林 九一・三。年譜あり)等がある。

『沼の詩人 沢ゆき』に紹介された甥の飯塚勲の回想に「仕事が終わった夜更けに、こっそりと机に向って読書をし、詩作し、やかましい姑の目にとまらないように、便所の中ろうそくの灯の下で、また風呂を焚くときのかすかな明りで、詩の原稿を書くことがしばしばであったと、後年語ってくれた」「詩人たちや雑誌社からの通信が繁くなるにつれて、姑や夫の不快をかい、叔母はやむなく実家の親戚である近くの藤橋家に郵便の宛先を変え、藤橋家の人がその郵便物をこっそり叔母に届けるようはからってくれたということである」とある。ゆきは詩作を続ける一方で、病気がちな夫(四三年死去)を支え、三男三女を育て(次男福二郎は四五年戦死)、商家の嫁として姑(五〇年死去)にも人一倍つかえたらしい。なお、『詩人 澤ゆきの世界』に「三男と三女の育児と家事に追われる生活」(二一〜五〇年)とある間もゆきは「日本詩壇」、「婦人文芸」等に詩を発表している。

十九を抱いた／なだらかな沼よ／／あがきを止めた十九

の命を沼へおき／人妻に変わった私の「屍」に／それからの太陽は色あせた／／生きながら死んで／凡てが仇な消滅に急ぐ時／屍を虚妄に懸け／仮装の私はいつわりに生きた／(中略)／七十を過ぎて／今も沼においた十九の孤独に／恋する
(「永遠の恋」『沼』(二)所収)

等の詩を見ても、明治時代に一九歳で親の決めた結婚を強いられ、詩への志をくじけさせられた無念が諦念となり詩情にまでなるまでの苦悶がしのばれる。

(三) 『孤独の愛』の川路柳虹「序」には、「澤ゆき子君は優しい心をもった女性だ。その詩は最もなだらかな感情の波にのつて、夢のやうな、月光の下に嘘啼する噴泉のやうな微妙な旋律と色調をもつてゐる」「私の推奨する所は実にこの詩集には女ならではのきかれぬ共感と苦悩があることだ」とある。同書出版当時、「主婦として働くひまひまにさびしく詩を歌つてゐるのだといふ」現代詩歌 創刊以来の熱心な女流の一人で多くの女流が次ぎ次ぎに詩を離れて行く間に強い執着を捨てずに遂に立派な集を編むまでになった(「美しい詩集を編んだ 二人の女流詩人 孤独の愛に生きる澤夫人と 愛と自由を求むる中田夫人」。「新進の二詩人」の写真人。「読売新聞」婦人欄 二一・五・五)と、紹介されている。花世は、「澤ゆき子さんの詩風はぬひとりである」「低いさゝやき、消えがての夢、読んでゆくよりも、活字面で、いつまでも眺めてゐると沼のきしの青い葦のしげみの光りのやうである。気分詩をつくる人としてはユニークであらう」(「最近女流文芸鳥瞰

図「近代日本婦人文芸女流作家群像」所収」と評した。また、「明治大正文学美術人名辞書」（二六・四、前出）の扱いは大きく、「女史は確かに閨秀作家中稀にみる詩的天分の持ち主」「米澤順子、高安やす子、中原綾子等と相並んで現代女流詩人として聞えてゐる」として、「夜ぎり」（『孤独の愛』所収）の第三連が引用されている。『日本現代詩大系 第七巻』（前出）に『孤独の愛』から「孤独の愛」「夜の面ざし」「かなしみの日」「まひるの水盤」が収録された。

（四） 処女地 3号 一九二二（大正）・六 「ふけてゆく春」（詩）——同号「常陸より」（「おとつれ」欄）に「御送付をうけたのはまるで夢のやうです」「婦人ばかりのしかも立派な雑誌が、はな／＼しい生声を上げたと云ふ事は沁々心強い現象です」とある。送付に対する「御礼のしるしに」送った詩と考えられる。

処女地 8号 一九二二（大正）・一一 「霧の跡」（詩）

藤村は「婦人の眼ざめ」（『女性日本人』二二・六、飯倉だより）アルス（二二・九所収）に、澤ゆき子女史から寄贈を受けた『孤独の愛』一巻の中には女詩人ならではと思はるゝ詩が多い」として「やまうど」の一節を引用し、「何といふ女らしさ、溺れ易さだらう。これほど病的と思はれるまでに女性自身の深い感覚を意識して来たことは、故一葉女史の描いた婦人なぞには見られない」と書いた。藤村とゆきについては、伊東一夫・青木正美編『島崎藤村コレクション第三巻 藤村をめぐる女性たち』（国書刊行会九八・一一）「沢ゆき」に詳しい。ゆきは伊東氏に、藤村の詩によつ

て詩作を志すようになり、『若菜集』の「若水」を「生涯にわたつて慰めとし、詩魂の浄めとしてきた」と伝えたという。

結 び

川島つゆは『加賀の千代女』執筆にあたって「封建の世代を背景として、身内に何物かを蔵する女性の歩まなければならないかった孤独な道が目前に開けてきて、それはもう千代女でもなく私でもなかった」と書いた（『女流俳人』前出）。本稿で取り上げた女性作家四人は、「処女地」以前にそれぞれの分野で知られており、「処女地」以降も作家、教育家、女性運動家、俳諧研究者、詩人として地道に活躍した人である。しかしながら、「身内に何物かを蔵する女性」の「孤独」は、当時の社会の中で、四人共が持ち続けたものであったと考えられる。

「処女地」は、生田花世にとっては、「女流文芸雑誌の主流」の一つとしても、自らの文学生活の「コマ」としても、確かな位置を占める雑誌であった。池田小菊が「新しい女」についての当時の自らの考えをまとめた「処女地」掲載論文は、戦後、小菊が婦人運動に入っていくことを予測させる。川島つゆは、筆に対する妄執から芭蕉の「一筋」に思いを寄せる文章を「処女地」に掲げて、やはり俳文学研究者になる素地を感じさせる。「処女地」以前に出した詩集を藤村に紹介された澤ゆきは、「婦人ばかりの」処女地」を「心強い」と記した。

それぞれの作家にとって、「処女地」に出会い、その時期にし

か書けなかった文章を書く機会を得たことの意味は、今日考えられるよりも大きい。当時、『婦人世界』（実業之日本社）、『婦人公論』（中央公論社）等の商業誌はあったが、著名ではない女性の発表機関は乏しかった。神近市子が、実力がありながらそれを世に問えない女性作家を思い「せめて一つだけでもいゝから前の『青鞥』のやうにどんなに無名な婦人でも書いたものを発表することが出来る機関があつたら、どんなにいゝだらう」（『時感二三（下）』、『読売新聞』二七・六・一）と書いているような状態だったのである。書くことの意味について、生田花世は「どうして生きていくかという問題にぶつかつて、それをとつかまえて、追求するには、文学以外になかつた」、「それ以外に女の人が自分の道を開くのは方法がなかつた」と語っている（『座談会『青鞥』の思い出』、『国文学解釈と鑑賞』六三・九）。

なお、「処女地」と「女人芸術」との関係についてはほとんど論じられたことがないが、「女人芸術」には、生田花世はもちろん大井さち子、河井稲子、田尻稲子、埴原久和代、横瀬多喜、川島つゆ、澤ゆき、鷹野つぎ、若杉鳥子、若山喜志子といった、相当数の「処女地」の執筆者が書いている。「処女地」の編集実務をとめ、その経歴を買われて後に「女人芸術」の編集長となる素川絹子（加藤きぬ子）の存在を見落とすわけにはいかないが、両者の結びつきの後ろには、花世の奔走があると考えられる。横瀬夜雨から河井醉茗に宛てた書簡（二八・七・一九）に「花世さんから多喜子に女人芸術の原稿を頼んで来た」とある（『塔影』七一・

一〇の「友情」欄掲載）。「多喜子」は詩人横瀬夜雨の妻、花世が「処女地」上の手紙文に注目していた横瀬多喜である。花世は「処女地」以前にすでに「青鞥」の女性執筆者に対して「どうぞ続いて書いて下さい。いゝものが書けるのに書かなくなつて了ふ多くの女の人の事を思ふと惜しくなりませんから」と書いていた（『生活と芸術——青鞥 仮面』、『新潮』一五・六・一）。おそらく、「若い人の世話をよく見た」（『面倒見のいい』）花世は、横瀬多喜宛と同様の手紙をかつての「処女地」同人達に送つたと推測される。

本稿に取り上げた四人は必ずしも「処女地」だけが発表機関であつたわけではないが、このような状況の中で、進んで「処女地」に集まり、注目される作品や、その後の生涯を予測させる文章を発表した。花世に負うところも大きい「処女地」が、「女流文芸雑誌の主流」として、「女人芸術」といったような後続雑誌につながり、「女流作家群像」をつくる一つの機会をつくつたことは押さえておきたい。

〔注〕

- (1) 『明治大正文学美術人名辞書』（松本龍之助編 立川文明堂 一九二六・四）、『日本近代文学大事典』（日本近代文学館 小田切進編 講談社 七七・一一～七八・三）、『現代俳句大辞典』（安住敦「ほか」編 明治書院 八〇・九）、『島崎藤村事典 新訂版』（伊東一夫編 明治書院 八二・

- 四)、『図説教育人物事典 下巻』(唐澤富太郎編 ぎょうせい 八四・七)、『奈良近代文学事典』(浦西和彦「ほか」編 和泉書院 八九・六)、『現代女性文学辞典』(村松定孝・渡辺澄子編 東京堂出版 九〇・一〇)、『日本女性人名辞典』(芳賀登「ほか」監修 日本図書センター 九三・六)、『青鞥』人物事典—110人の群像—(らいてう研究会編 大修館書店 二〇〇一・五)、『詩歌人名事典 新訂第2版』(日外アソシエーツ株式会社編 日外アソシエーツ 〇二・七)、『日本女性文学大事典』(市古夏生・菅聡子編 日本図書センター 〇六・一) 参照。
- (2) 紅野敏郎「本のさんぽ²²⁾ 女流文芸史のはしり—生田花世『女流作家群像』—」(『国文学 解釈と教材の研究』一九七四・三)。
- (3) 尾形明子「解説 生田花世著『近代日本婦人文芸 女流作家群像』」(山崎朋子監修『叢書女性論 別巻 日本のフェミニズム』大空社 九七・二)
- (4) 中野光「合科学習の遺産の再評価」(日本教育方法学会編『学校文化の創造と教育技術の課題』明治図書 九一・一〇) 志村廣明「一九二〇年代における池田小菊の授業論に関する一考察」(篠田弘「ほか」編『歴史のなかの教師・子ども』福村出版 二〇〇〇・三) 浅井幸子「池田小菊による教室の『家庭化』の構想」(藤田英典「ほか」編『大正改革』世織書房 〇二・九) 松本博史「池田小ぎくの『合

- 科学習』—奈良女子高等師範学校附属小学校における最初期『合科学習』の実践—(神戸女子大学文学部紀要 〇五・三) 伊藤朋子「わが国のドルトン・プラン受容における『自由』と『協同』」(ドルトン・プランにおける「自由」と「協同」の教育的構造 風間書房 〇七・二) 等。
- (5) 張競「池田小菊『帰る日』と翻案小説『風に飛ぶ柳のわた』—張寶平の大正文学受容をめぐる—」(明治大学教養論集 〇四・九) 弦巻克二・吉川仁子「池田小菊関連書簡—志賀直哉未発表書簡を含めて—」(池田小菊関連書簡補遺・その他) (『叙説』〇六・三、〇七・三) 紹介に、佐藤富哉「池田小菊『許されぬ接吻』について」(『名古屋近代文学史研究』一九七三・五) 真銅正宏「池田小菊『帰る日』」(浅田隆・和田博文編『古代の幻—日本近代文学の『奈良』—』世界思想社 二〇〇〇・四) 等。
- (6) 上笙一郎「池田小菊著『私の教育記録』」(『叢書女性論 別巻 日本のフェミニズム 前出』) には、小菊は「教育」と『文学』、そのふたつのものに立脚する(『児童文学』、および『女性運動』という四つの領域で活躍)した、とある。
- (7) 後年においても、たとえば川端康成は、小菊の「奈良」を、「暗鬱で無為とも見える生活」は「一種の味を持つてすわつてゐる。それが作者の筆致の特徴なのだけれども、この人が影響を受けたらしい、志賀直哉氏や滝井孝作氏のスわり方とは、大分ちがふやうである」と評している(『女

性作家に就て、「朝日新聞」一九三八・一一・四。

- (8) 『一茶俳句新釈』(前出)「自序」に、「本書の刊行に至るまでには、半田良平先生の懇篤なる尽力、並に山中笑翁其他知己諸氏の教示助言に負ふところが多かつた」と書かれている。半田良平は歌人。紅野敏郎「逍遙・文学誌」¹¹⁹『武蔵野』山中共古記念号——鳥居龍蔵・中島利一郎・山田一・三村清三郎・川島つゆ・三村清三郎ら「『国文学解釈と教材の研究』二〇〇一・五」に「武蔵野 山中共古記念号」(一九二九・九)の文章等が指摘されている。

- (9) 岡本文弥はつゆとの連句付合やその最期について書いている(「紫匂」——川島つゆさんとの交友、「婦人公論」七三・一)。また「石川三四郎もあたしの新内の会の常連でしたが、川島つゆ女史が石川さんに誘われてよくみえました。一茶や千代女の研究家でもある俳人で、あたしは女史にさそわれて連歌をやったことがあります」と語っている(森まゆみ「長生きも芸のうち 岡本文弥百歳」毎日新聞社 九三・一二)。「断想 川島つゆ先生」(前出)に、山中笑、石川三四郎、岡本文弥との親交について言及がある。

- (10) 『詩人 澤ゆきの世界』(前出)に指摘があるように、『鷗外全集 第三十五巻』(岩波書店 七五・一)「日記」の一九一一「明44」年一月一日の項に「茨城県茎崎の相澤ゆき来訪す」とある。書簡は全集未収。同書には甥の飯塚

勲氏所蔵の「先日御来話ノドイツ語修業ノ事心当リノ人二問ヒ合せ候処」(一一・一一・一五)、「詩人になるには詩人の家にありてならえるものにはあらず候」(一二・一一・一〇)、「詩稿到着いたし候 小生は長詩は久しく打無置き試みず従て批評も出来兼候二付友人河井醉茗に見せ候事にいたし候」(一二・三・二五)などという鷗外からの書簡が紹介されている。同書には、「あなたはやつぱり影と夢の詩人だとおもひます」という山村暮鳥らの書簡の紹介もある。「沼の詩人 沢ゆき」には佐藤惣之助、深尾須磨子、井上康文らの書簡が紹介されている。

- (11) 「女人芸術」発刊時「生田花世さんが訪ねて来られて、今度時雨さんが女ばかりの雑誌を出すからと言うことで参加しました」という望月百合子の回想等が『女人芸術』の世界——長谷川時雨とその周辺(尾形明子 ドメス出版 八〇・一〇)に紹介されている。